

平城宮東院地区の調査

—第595次

1 はじめに

調査地は特別史跡平城宮跡の東の張り出し部南半の東西約250m、南北約350m東院地区に位置する（図1）。『統日本紀』などの文献により、東院地区には皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られている。また、神護景雲元年（767）に完成した「東院玉殿」や、宝亀4年（773）に完成した光仁天皇の「楊梅宮」は、この地にあったと考えられている。

東院地区では、これまで南半や西辺を中心に発掘調査が進められており、2004年度以降、東院地区西北部の発掘調査を継続して実施してきた。第593次調査では大規模な井戸を検出し、東院北部の空間利用を考えるうえで、重要な知見を得た。今回の調査では、井戸周辺の空間利用と施設の様相の解明を目的として、第593次調査区の東方に東西27m、南北42mの調査区を設定した。調査面積は1,512m²で、このうち新規掘削部分は1,134m²である。2018年1月22日に開始し、7月13日に調査を終了した。

2 周辺の調査成果

今回調査区の西隣に位置する第584・593次調査区では、奈良時代前半（東院1期・A期）の桁行9間以上の東西棟建物SB19999と桁行10間の南北棟建物SB19515・19970を検出した。SB19999とSB19515は柱筋が揃うことから併存が考えられ、奈良時代前半における東院地区中枢西部における空間利用が明らかになった¹⁾。また、第593次調査区北半では、東部で大型の井戸SE20000を、西部ではこれに接続する東西溝SD20010・20011と、SD20010から北に分岐する溝SD20012・20013、また、これらの溝を内部にとりこむ東西棟建物SB20015を検出した¹⁾。これらは奈良時代後半（東院C期）に一体的に運用されていたようであり、SE20000から取水した水の計画的利用が示唆される。

第584・593次調査区の南に位置する第401・423・503次調査区では、掘立柱の単廊である回廊SC18936・19600が確認され、その内（東）側には南北棟建物

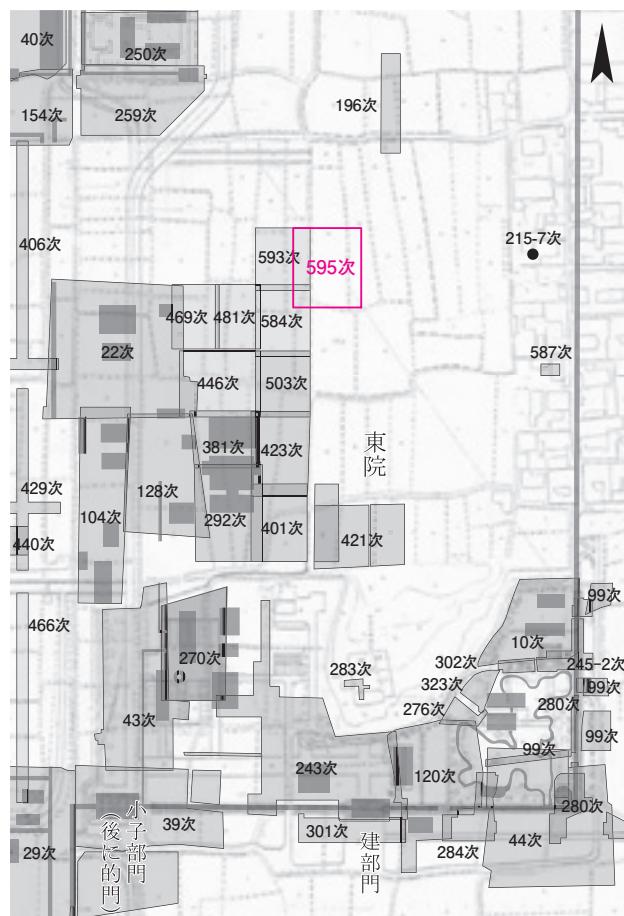


図177 第595次調査区位置図 1:4000

SB19116・18916が、柱筋を揃えて同時期に展開することを確認している。これらは、東側の東院中枢部を区画する同時期（東院6期）の一連の建物群と捉えられた^{2)・3)・4)}。こうした区画施設は、これよりも遡る時期でも位置や規模を変えて見つかっていることから、単廊により区画された東院中枢部が継続的に利用されていたことが指摘された⁵⁾。なお、区画施設の東側には、複数時期の東西棟の四面廊建物や北廊建物などが見つかっている。

一方、今回調査区の西・西南方に位置する第292・381・446・469・481次調査区では、大小規模の総柱建物群や比較的小規模な建物が、頻繁に建て替えられながらも、時期を通じて展開することがわかっている^{6)・7)・8)}。出土土器の種類・量などもかんがみて、東院西辺が東院中枢部のバックヤードとして機能していた可能性が示された。また、第481次調査区では、第292次調査区から展開する総柱建物が南辺までにとどまり、北部に展開しないことがわかった⁹⁾。加えて、北部西半では甕類の出土が多く見られたことから、西辺南部とは異なり厨や貯蔵施設の存在が推測された。

3 基本層序

表土（約5cm）、整備盛土（約35cm）、旧耕作土・床土（約20cm）、奈良時代の遺物包含層（5～10cm）と続き、その下の奈良時代の整地上面で遺構検出をおこなった。

今回の調査では、奈良時代の整地土3層を確認した。これらは上から順に、炭混灰褐色粘質土の上に大粒径の礫（径約5～7cm）を敷いた上層整地土、小粒径の礫（径約3～4cm）を敷いた中層整地土（以上図178）、そして、礫をともなわない粘土質の下層整地土である。上層の2つの整地土は奈良時代後半～末期に積まれたと考えられる¹⁰⁾。上層整地土は、炭混灰褐色粘質土の上に大粒径礫による礫敷きが全面的に貼られていたと思われるが、今回の調査では礫敷きは調査区西北部の一部においてのみ確認できた。なお、上層整地土にともなう炭を含む土は南北棟建物SB20120の範囲を中心に広がる。また、中層整地土は、第593次調査区で検出した井戸SE20000と南北棟建物SB20120の間で確認した。

4 検出遺構

今回の調査で検出した遺構のうち、奈良時代の遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀1条、石組溝2条、素掘溝11条、方形区画8基、階段1基、土坑2基、被熱痕跡5基である（図179）。西隣の第593次調査の成果を踏まえると、東院北辺の遺構は4期に区分でき、今回の調査区では全ての時期（A～D期）の遺構を確認した。この時期区分は、第584次調査までの東院地区西北部の調査区で確認した6期区分（1～6期）と図194のように対応する。遺構の時期は、遺構の掘り込み面、配置、および重

複関係に基づいて決定した。以下では、時期ごとの検出遺構について記述を行ったのち、時期不明の遺構について説明する。

A期の遺構

東西棟建物SB19999 第593次調査区から続く、桁行10間（約29.7m）、梁行3間（約9.0m）の南廂付きの大型掘立柱建物。柱間寸法は桁行・梁行・廂の出ともに約3.0m（10尺）等間。今回調査区西部で桁行2間分を検出し、全体の規模を確定した。柱穴掘方は、東西1.1～1.25m、南北0.95～1.35mで、隅丸長方形あるいは不整長円形を呈する。

B期の遺構

東西棟建物SB20060 東端で検出した大型の掘立柱建物。周辺遺構の配置にかんがみてB期に位置づけられる。桁行2間以上、梁行2間の身舎に南廂が付き、調査区東方に続く。柱間寸法は桁行・梁行ともに約3.0m（10尺）等間。身舎柱・廂柱の柱掘方は一辺約1.2～1.8mの隅丸方形で、身舎内部に一辺約1.0mの隅丸方形の掘方をもつ、やや小振りの床束とみられる柱穴をともなっており、身舎内部は床張りであった可能性が高い。

溝SD20057～20059 東西棟建物SB20060にともなう雨落溝。南面のSD20057、西面のSD20058、北面のSD20059がSB20060を取り囲み、SD20057・SD20059はさらに東に続く。いずれも幅約0.5m、完掘したSD20058・20059は深さ約5～10cm。

東西塀SA19516 調査区南部で検出した掘立柱の東西塀。西の第469・481・584次調査から続き、今回調査区では5基の柱穴を確認した。調査区中央部で整地土に覆われるため、柱穴を検出していない部分もあるが、今回

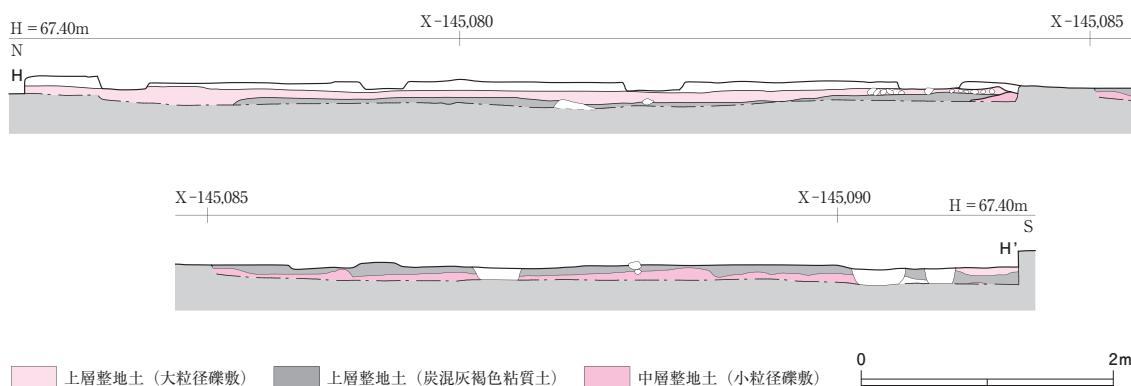


図178 第595次調査区整地土土層図 1:60

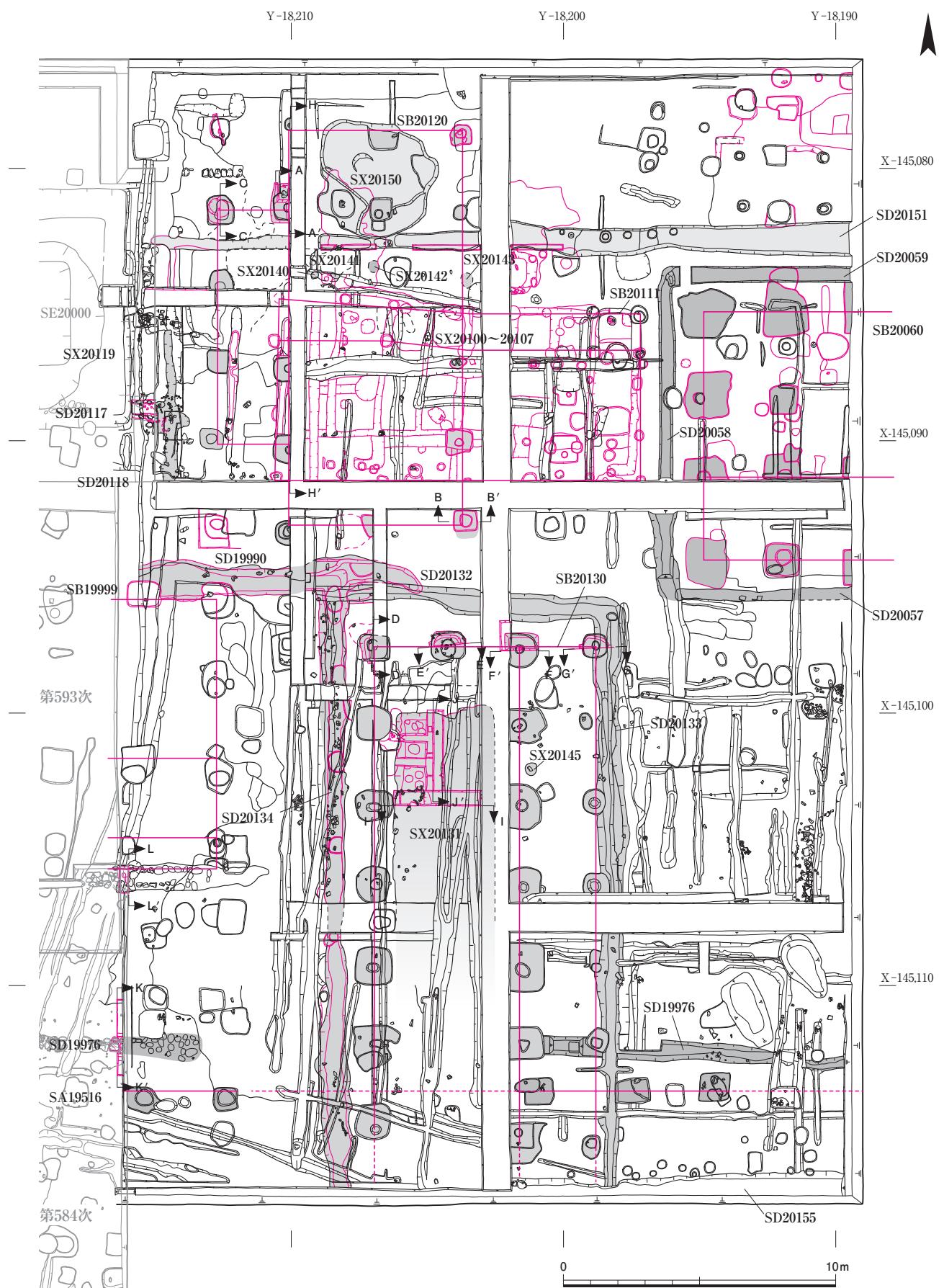


図179 第595次調査遺構図 1:200

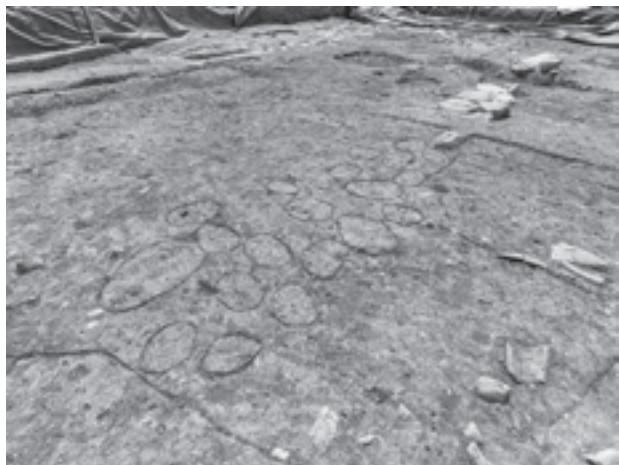


図180 東西石組溝SX19976検出状況（北東から）

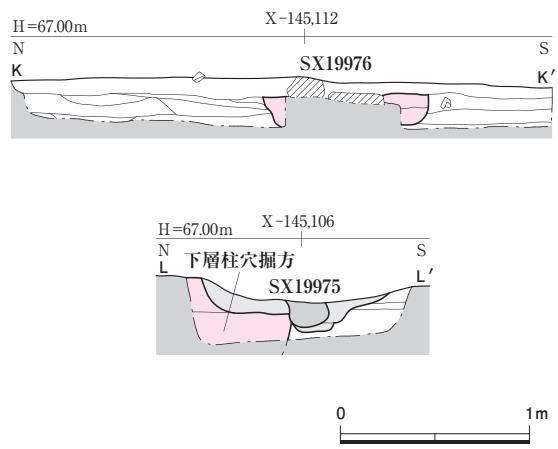


図181 東西石組溝SX19975・19976断面図 1:40



図182 方形区画SX20100~20107・東西棟建物SB20111遺構図 1:80

の調査区内では柱間8間分と考えられる。柱間寸法は、確認できた箇所では約3.0m(10尺)等間。

東西石組溝SD19976 調査区南部で検出した石組溝。第584次調査区東北部で検出した遺構がさらに東側に続いている。今回の調査区では側石と石の抜取痕跡を検出した(図180・181)。調査区中央部では整地土に覆われるが、整地が残らない調査区東南部では、SX19976の延長線上で抜取溝を検出しており、調査区の東方へと続く。SA19516と並行するため、SA19516とともに南北溝と考えられる。

(山藤正敏、海野聰／東京大学)

方形区画SX20100~20107 周囲を幅約40cm、深さ約15cmの素掘溝で囲まれた、相互に連結する長方形の区画(図182)。中層整地土上面で検出し、西端のSX20107の西溝が後述の南北棟建物SB20120の西側柱柱穴によって壊さ

れていますことから、B期に位置づけた。調査区南北畔下に位置する2基(SX20103・20107)の平面は部分的にのみ確認しているが、これらもあわせて東西に8基並ぶと思われる。各遺構の東西幅は約1.5~1.9m、南北長は東部のSX20100~20102で約6.6m、西部のSX20103~20107で約5.0~5.4m。

東端のSX20100内では、区画北端に方形遺構SX20108とその北寄り中央に小穴SX20113を検出した(図182・183)。SX20113は径約30cm、深さ約20cmで、内部には人頭大の安山岩が据えられたように落ち込む。SX20108は東西約1.2m、南北約0.85m。

SX20100に西隣するSX20101では、北部中央に小穴SX20148、その南側で被熱痕跡SX20147、また中央附近で被熱痕跡SX20110、その中軸線上すぐ南で小穴

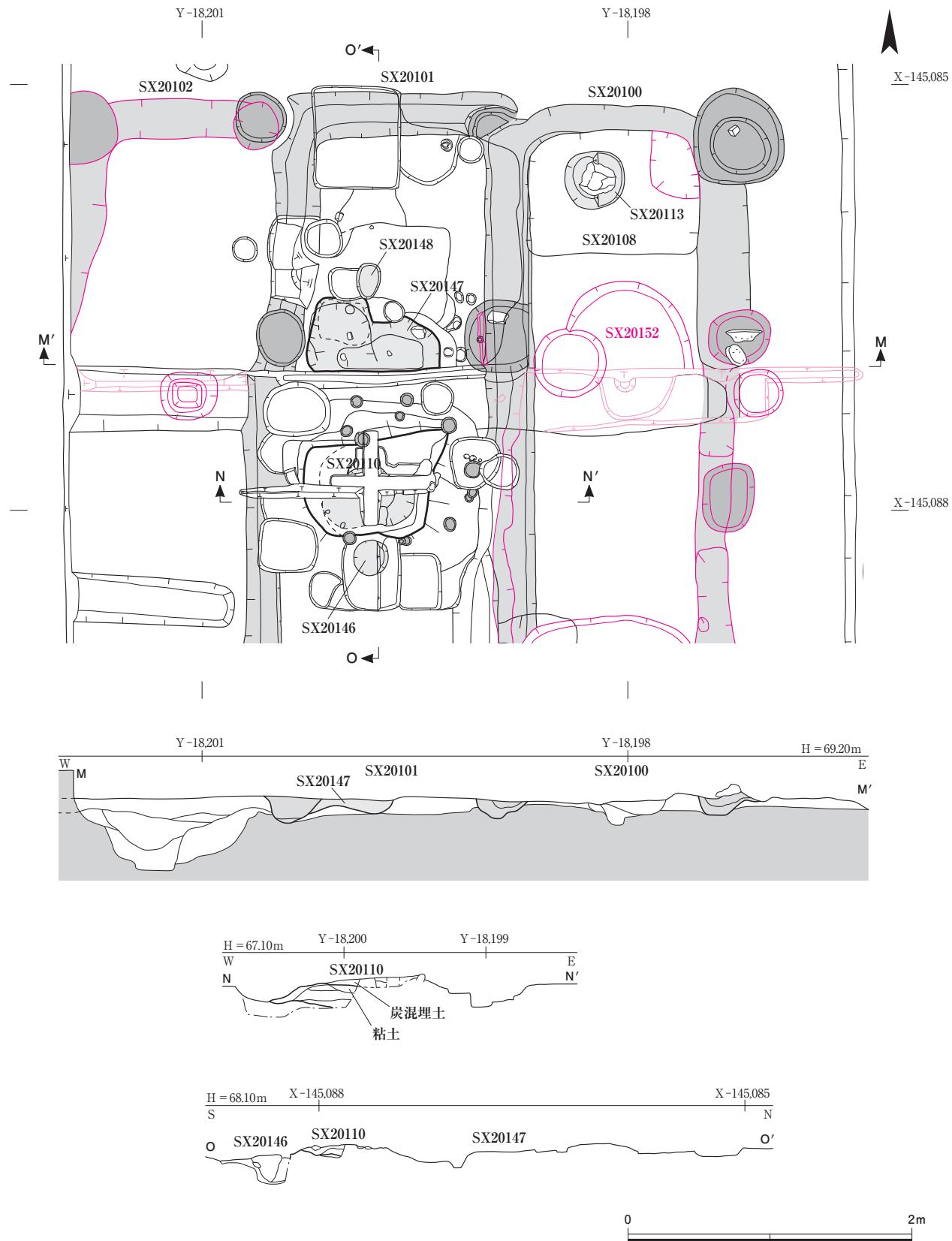


図183 方形区画SX20100・20101北半部遺構図・断面図 1:40

SX20146を確認した（図183）。二つの被熱痕跡はその重複関係にかんがみて、北のSX20147のほうが古い。どちらも粘土質の土が人為的に敷かれ、熱を受けている。SX20147は南端部を東西溝で破壊されているが、もとは径約1mの円形を呈したとみられる。SX20110は径約0.9mの円形で、中央が皿状にくぼむ。周辺より若干高く土壇状に盛り上げた上にのる。周辺には径10cm程度の複数の小穴がほぼ等間隔に廻る。被熱状況は、北側で軽微で、南側で強く残る。内部には炭を多く含む粘土質の土が堆積していた（図183断面図・184）。SX20146は径約25cm、深さ約25cmで、石の抜き取り痕跡を認めた（図183断面図）。周囲には焼けた金雲母片を多量に確認したが、炭化物が混じる焼土の広がりは認められなかった。SX20110と一緒に構築されたのであろう。

SX20104では、区画北部で方形遺構SX20109を検出した（図185）。SX20109は東西約1.2m、南北約1.3m、本遺構検出面からの深さは約20cmで、砂利を含む黄白あるいは黄橙粘土を層状に突き固めており、掘込地業状を呈する。

（馬場 基・国武貞克）

東西棟建物SB20111 桁行8間（約13.4m）の北廂付の東西棟掘立柱建物（図182）。柱は、SX20100～20107を区画する南北溝の位置にこれ壞すかたちで設けられている。桁行柱間は、SX20100～20106が約1.65m（5.5尺）、西端のSX20107のみやや幅広く約2.55m（8.5尺）。身舎の梁行は東辺で3間、西辺で2間。柱間は、東辺で北から約1.2m（4尺）、約1.95m（6尺）、約1.65m（5.5尺）で中央間のみやや広く、西辺で約2.55m（8.5尺）。梁行方向では、廂の出は約1.8m（6尺）。柱穴の掘方はいずれも径40cmの円形。柱穴掘方の形状・規模や不均一な柱間寸法から簡便な建物であったと推察される。柱穴の配置状況に鑑みて、SX20100～20107を覆っていた簡易的な建物とみられる。

C期の遺構

南北棟建物SB20120 調査区の西北部で検出した南北棟掘立柱建物。B期のSX20107の西溝を西側柱柱穴が壊していることや、周囲の遺構との配置関係からC期とした。規模は桁行5間（約14.8m）、梁行2間（約5.9m）で、桁行中央3間には西廂をともなうと考えられる。建物全体の床面積は約87m²。柱間寸法は桁行・梁行とともに約3.0m（10尺）等間、廂の出も約3.0m（10尺）。身舎の柱穴掘



図184 SX20110検出状況（南から）

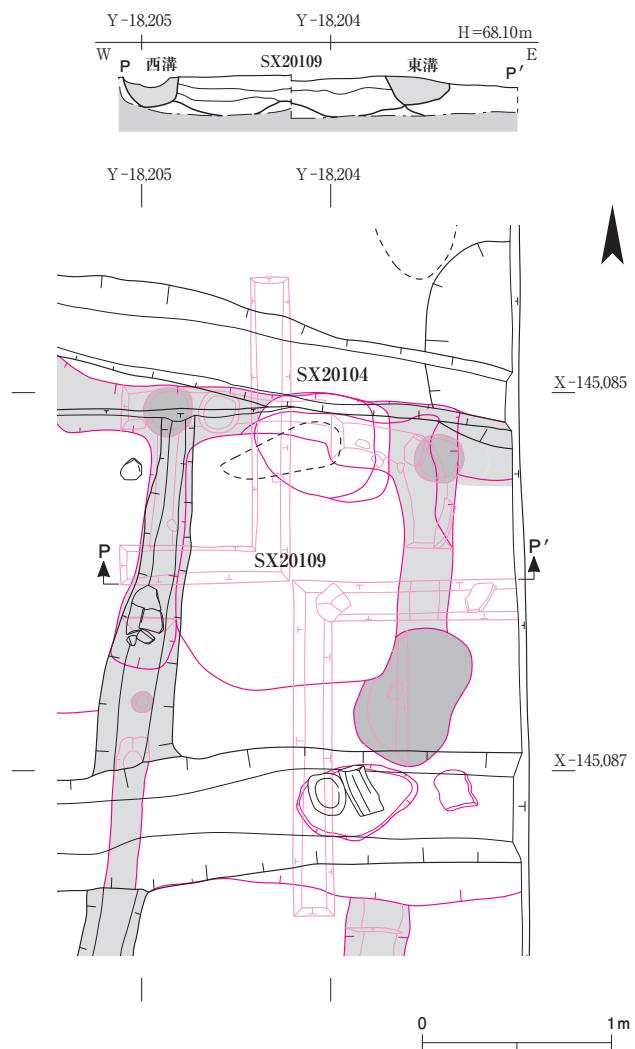


図185 方形区画SX20104北半部遺構図・断面図 1:40

方は、東西0.8~1.1m、南北0.8~1.1mでほぼ正方形を呈する。掘方の深さは、東西側柱柱穴が0.85~1.1m、北妻柱柱穴が遺構検出面から0.4mである（図186-A・B・C）。建物の範囲は、径約3cm未満の小礫敷きをともなう。なお、SB20120の西方には階段SX20119と井戸SE20000があり、南北棟建物と井戸をつなぐ一体的な空間利用がうかがえる。

南北棟建物SB20130 調査区の中央部から南部で検出した南北棟の掘立柱建物。上層整地土の下から検出し、SB20120との位置関係からC期とした。桁行8間以上、梁行2間の身舎に東廂が付く建物で、調査区の南方へと続く。柱間寸法は梁行約2.7m(9尺)等間、桁行約3.0m(10尺)等間、廂の出は2.7m(9尺)。身舎の柱穴掘方は、東

西1.2~1.3m、南北1.0~1.7mでほぼ正方形を呈する。掘方の深さは、遺構検出面から0.85mである（図186-D・E・F・G）。柱穴は炭を多く含む上層整地土に覆われる。

方形土坑SX20131 SB20130の身舎の範囲と近似する範囲の方形の土坑。東西約3.85m、南北約6.9m以上で、南端は整地に覆われており確認できないため、全体の規模は不明である。土坑の深さは最大約45cmで、弓形に落ち込む底面を呈する（図187）。土坑底部の下層は炭を含み、上層は粘土で丁寧に埋めている。軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦を含む。

階段SX20119 大型の井戸SE20000（第593次調査区）の東方で検出した石組みの階段。西方のSE20000および東方のSB20120との位置関係からC期としたが、厳密な構

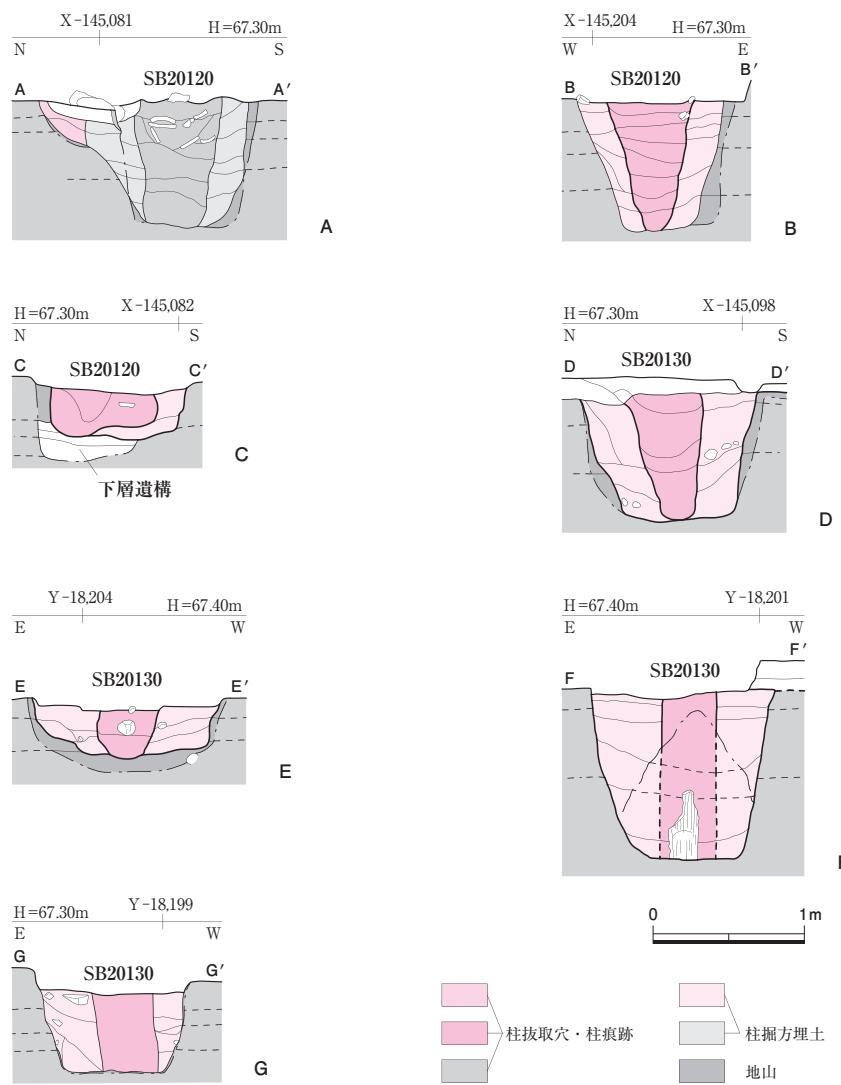


図186 第595次調査区柱穴断面図 1:50

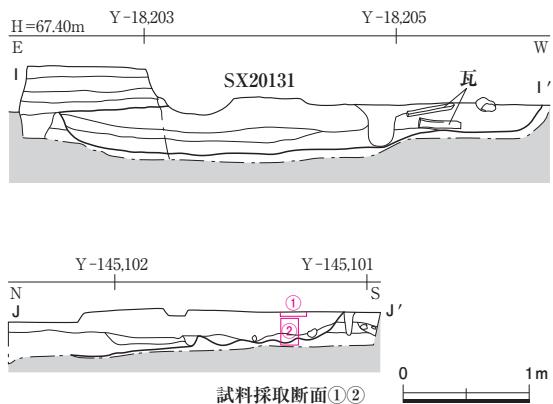


図187 方形土坑SX20131断面図 1:40

築時期は不明である。現存する石と石の抜取痕跡から、幅は南北約5.8m、奥行は東西約1.0m。東側の階段最上部と西側の井戸SE20000周囲との比高は約30cmであり、東側が高くなる。階段北辺が井戸の掘方北縁に揃い、階段南辺は井戸SE20000南辺に掘られた溝SD20003の南肩とほぼ揃う。また、階段南端より約50cm北には、階段に直行する東西溝SD20117が掘られ、西側の溝SD20003に接続する。階段東縁の一部では、縦に長い見切石が南北に並ぶ。なお、階段の段数は後世の削平により不明であるが、階段北部の東縁で1列分の敷石（奥行約30cm）が部分的に残っており、これを最上段として2～3段程度が西側に続いていたと推測される。階段の設置は、井戸SE20000と東方の地形的な段差をつなぎ、両空間を一体的に用いることを目的としていたと考えられる。

南北溝SD20118 階段SX20119の東方に位置する南北溝。長さ約11.4m、幅約20～60cm。北部で南部よりも幅が狭まる。溝の南部分には東西溝SD20117が西から接続する。溝の中央部、とくに東西溝SD20117との接続部分周辺では、埋土に径3cm程度の円礫がやや多く混じる。

東西溝SD20117 階段SX20119の南に位置する東西溝。長さ約1.2m、幅約45cm、深さ約10cm。西側が井戸南辺の溝SD20003に、東側が南北溝SD20118に接続する。

東西溝SD19990 調査区西部で検出した東西素掘溝。第593次調査で検出した東西溝の延長部で、幅約1.0m、深さ10～20cm、長さ約10m分を確認した。調査区中央部で南北溝SD20134に接続し、東端部で東西溝SD20132に接続する。SD20132・20134とともに一時に埋められており、瓦・土器を多く含む。埋め立て後にはていねいな整地をほどこす。

東西溝SD20132 調査区中央部で検出した東西素掘溝。長さ約10m、幅約1.0m、深さ5～10cm。SD19990よりやや南に位置し、西端で南北溝SD東西溝SD19990と接続する。東端では南北溝SD20133と接続し、南に折れる。SD19990・20133・20134とともに一時に埋め立てられたとみられる。

南北溝SD20133 東西溝SD20132の東端部で南に折れる南北素掘溝。幅約0.9m、深さ約0.1m、長さ約21.5m分を検出し、調査区の南方へと続く。北半を中心に多量の瓦・土器が出土した。

南北溝SD20134 東西溝SD19990から分岐し、東西溝SD20132と接続する南北素掘溝。幅約0.8m、深さ0.2～0.3m。今回の調査区では長さ約21.5m分を検出し、調査区の南方へと続く。南部ではやや東に曲がり、全体で多量の瓦・土器が出土した。

被熱痕跡SX20140～20143 調査区西北部で検出した被熱痕跡。大粒径礫敷き（上層整地土）の下層で検出し、東西方向に4基みられる。SX20140はやや不整形であり、長径40cm、短径25cm。SX20141は北半が上層整地土に覆われているが円形と考えられ、径35cm。SX20142は円形を呈し、径40cm。SX20143はやや長円形を呈し、長径55cm、短径40cm。いずれも内部の土壤が強い被熱により赤化・硬化している。SX20141は、焼土の上に炭が堆積しており、北方の上層整地土下に続く（図188）。なお、相互に近接するSX20140・20141は、同じ遺構の一部である可能性も考えられる。

被熱痕跡SX20145 調査区中央部で検出した被熱痕跡（図189）。ほぼ円形を呈し、径約45cm。内部の土壤が3～4被熱により赤化・硬化しており、焼土を多く含む。中央部には、粘土が被熱を受けて硬化した炉底とみられる部位（長さ20cm、幅12cm、厚さ1～2cm程度）が遺存する。

D期の遺構

大土坑SK20150 調査区西北部で検出した土坑。東西約3.9m、南北約3.8m、深さ約25cm。完形を含む多量の軒丸瓦・軒平瓦が出土した。瓦は奈良時代中頃から後半のもので占められる。土坑の底面から南北棟建物SB20120の柱穴掘方を検出したことから、SX20150はSB20120廃絶後に掘り込まれたと考えられる。

東西溝SD20151 調査区北部で検出した東西素掘溝。幅約0.8～1.3m、深さ約10～15cm、今回の調査区では長



図188 被熱痕跡SX20140・20141検出状況（南から）

さ約26m分を確認した。東西溝は西から東へ行くほど幅が広くなり、調査区の東方へと続く。大粒径の礫敷きからなる上層整地土を掘り込んで造られており、奈良時代末に構築されたと考えられる。

時期不明の遺構

東西石組溝SX19975 第584次調査から続く東西石組溝。側石と据付掘方、また、石の抜取痕跡を調査区西南部で検出した（図181-L）。東部は整地土に覆われており、東端は不明。

東西溝SD20155 調査区南端で検出した深さ約30cmの東西溝。今回の調査区では、溝の北半のみ確認した。なお、検出した部分の中央部付近では人頭の大礫を複数検出したが、これは溝の北側石と考えられる。溝の南肩は調査区外となり、溝は西部で南に振れるため、溝の幅と西端は不明である。一時に埋められたと考えられ、奈良時代後半の土器が多量に出土した。 （山藤・海野）

5 出土遺物

土器・土製品

本調査では、整理用コンテナ121箱分の土器が出土した。このうち49箱分が遺構にともなうものであった。とくに、C期の南北溝SD20134と詳細な時期が不明な東西溝SD20155からは一括性の高い多量の土器群が得られた。土師器は、皿Aと椀Aを主体として、杯A、杯B、杯C、椀C、皿B、杯B蓋、皿B蓋、高杯A、大型蓋、

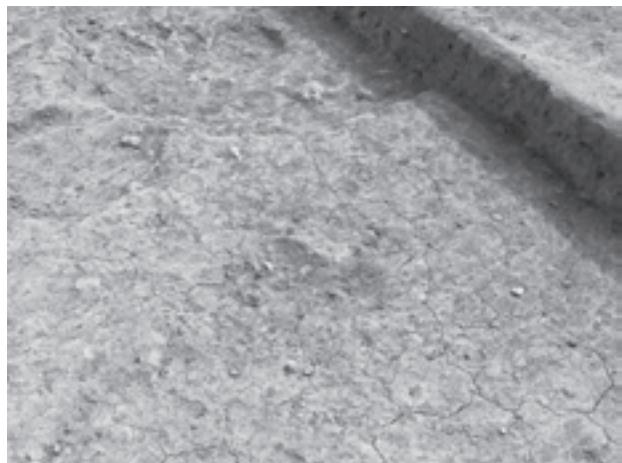


図189 被熱痕跡SX20145検出状況（北東から）

甕A、甕Bを含む。全体として、杯・皿・椀が多数を占めており、壺・甕は僅少である。これに比べて須恵器はかなり少なく、杯B、杯B蓋、皿B蓋、皿C、鉢A、鉢B、鉢F、盤、壺E、平瓶、甕Cから成る。

図190-1～23は南北溝SD20134出土土器。1～13は土師器である。1は杯C。外面の剥落が激しい。2～5は皿A。2はやや薄い作り。内外面の剥離が激しく調整不明、外面の一部が黒変する。3もやや薄手。外面が摩滅するものの、わずかな痕跡からc0手法とも見える。4は、口縁部がやや顯著に内彎し、端部を丸くおさめる。c0手法。杯の可能性もある。5は、内外面剥落のため調整不明。6・7は皿B蓋。6は、天井部から口縁部にかけて弧を描いてやや強く内彎し、端部は内側に短く屈曲して丸くおさまる。7は、天井部に焼成後に穿孔が施され、元来は5つの円孔が等間隔に配されていたと思われる。8～12は椀A。8は小型。外面は摩滅するが、部分的にヘラケズリの痕跡が見られる。9は、外面の一部が黒変し、ヘラケズリの痕跡が部分的に残る。10は、摩耗した外面にヘラケズリの痕跡が部分的に見られる。11は外面c0手法。12は内外面摩滅により調整不明。13は大型蓋。器面の剥落が激しいが、内面にはヨコハケ、外面にはタテハケが連続して施される。

14～23は須恵器。14は杯A。小型であり、内外面に火檻あり。15～18は杯B。15は、極めて短い高台を有する。16は、高台がわずかに外側に踏ん張り、端部は平坦面をなす。17はやや大型で深く、高台は外側に踏ん張り、端部は平坦面を呈す。18は、高台はやや外側に踏ん張り、端部は浅い凹面を呈す。口縁部内面には煤の付着が局所的に見られる。19～23は杯B蓋。19は陣笠形。頂部外面のみロクロケズリ。20はやや扁平に歪んでおり、頂部外面を口縁部に沿ってロクロケズリ。21も、頂部外面を口縁部に沿ってロクロケズリ。外縁には重ね焼きによる降灰が見られる。22は、頂部外面全体に丁寧なロクロケズ

りを施す。外縁には重ね焼きによる薄い降灰が見られる。23は、頂部外面にロクロケズリ。内面には「×」形の線刻が残る。

図190-24～38は東西溝SD20155出土土器。24～34は土師器。24は杯A。口縁部がほぼ真っ直ぐ斜め上方にひらき、端部はわずかに肥厚する。外面c 0手法。25・26は杯C。25は、口縁部外面直下に溝が廻り、わずかに外屈曲するように丸くおさまる。口縁部外面はヨコナデ調整。26はやや薄手であり、外面b 0手法。27は杯X。口縁部が強く外反する。摩滅のため外面調整不明。28～30は皿A。28は外面c 0手法。29は薄手の作りでやや浅く、内外面に部分的に煤痕が付着することから灯火器としての利用が推測される。外面c 0手法。30はやや大型品で、外面e-c 0手法か。31は皿B蓋。口縁端部内面には浅い溝が廻り、丸くおさまる端部を作り出している。外面全面に横方向のヘラミガキ。32は盤。外面全面に横方向のヘラミガキ。33・34は甕A。33は、胴部内面は指押さえ、外面にはヨコハケ。34は、胴部上半はわずかに丸みを帯びるが直線的。内外面剥落のため調整不明。

35～38は須恵器。器壁が厚いのが特徴である。35は杯A。口縁部と底部の境界付近に接合痕が見られる。36はやや小型の杯B。高台はやや外側に踏ん張る。37は皿B蓋。天井部外面にロクロケズリ、内面には同心円状の当て具痕が残る。外面に火櫻と思しき一条の黒線がはしる。38は盤。体部から口縁部は緩やかに外反し、口縁端部はわずかに折れ曲がって肥厚し、上端は面取りされる。口縁部下に上向きの把手が取り付く。上記の特徴から、SD20155出土土器は奈良時代後半に位置づけられる。

また、調査区西北部で検出したB期の方形区画SX20100～20107のうち、重点的に調査したSX20100・20104と関連する土層から出土した土器群を示す（図191-39～55）。これらは、他の遺構からの出土土器群とは異なる様相を示すので、ここで別途扱う。同遺構からは、土師器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、皿B蓋、椀A、高杯A、盤、大型蓋、甕A、甕B、鍔甕、甌、竈が、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、鉢A、鉢E、盤、壺A蓋、甕A、甕Cが出土した（表30）。39～49は、SX20100と関連土層出土土器。39・40は土師器。39は杯A。外面剥落のため調整不明。40は杯C。口縁端部外面にヨコナデ。41～44は須恵器。41は小型の杯A。口縁部

が著しく外反する。口縁端部の一部には、内外面に煤の付着が見られ、灯火器としての使用が推測される。42はやや浅めの杯A。底部外面ロクロケズリ。43は小型の杯B蓋。頂部外面ロクロナデ。44も杯B蓋。頂部外面ロクロナデ。45～49は土師器煮炊具類。45は鍔甕。口縁部はやや外方に開き気味に真っ直ぐ伸び、口縁端部は内側に小さく屈曲する。口縁部下には水平に鍔が廻る。胴部内面にヨコハケ調整。46は鍔甕の胴部。水平に取り付く鍔は端部が面取りされ、上方に小さく突出する。鍔および内面に煤の付着が多くみられる。内面はヨコハケ調整。47はやや薄手の小型甕。外面はタテハケ調整、全面が被熱したとみられ、やや黒変している。48・49は竈片。48は竈の釜孔口縁部片。内側に顕著に傾斜し、口縁端部は薄く作り出す。内外面には指ナデ、外面下端にはタテハケを施す。外面に庇の剥離痕跡あり。49は竈の庇片。表面は指によるナデ、裏面にはナデの後にタテハケが見られる。

50～55はSX20104出土土器。50は土師器椀A。外面c 3手法か。51～54は須恵器。51は皿A。口縁端部外面に重ね焼き痕。52は杯B。高台はやや外側に踏ん張り、端面は平坦。53は鉢E。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚しつつ丸くおさまる。54は大型の甕A。口縁部が大きく外反し、口縁端部は下方に折れ、端面は平坦面をなす。55は土師器竈の底部片。端面は平坦。外面はタテハケ、内面はヨコハケ。

このほか、C期以降の整地土から亀甲刻文付硯蓋が1点、東西溝SD20151・南北溝SD20133・20134から各1点ずつ転用硯が出土した。

（山藤）

瓦 磚 類

本調査区で出土した瓦磚類は表1に示した通りである。調査区全体から奈良時代前半（東院1期=A期）から後半期（東院5期=C期）までの軒瓦が出土している。ここでは軒瓦を中心に主要なものを報告する（図192）。

1・2・5・6は奈良時代前半にあたる東院1期（A期）の瓦。1は6284Eb（平城瓦編年（以下、瓦編年と略称）I-1期）、2は6308Ab（同II-2期）、5は6663A（同II-2期）、6は6721Ga（同II-2期）。7は6691A（瓦編年III-1期）で、東院2期（B期）に相当する平城還都後の瓦。3・4・8は東院3期（C期）の瓦・3は6133Aa、4は6282Ib、8は6702A（いずれも瓦編年IV-1期）。9は6689C（瓦編年V期）

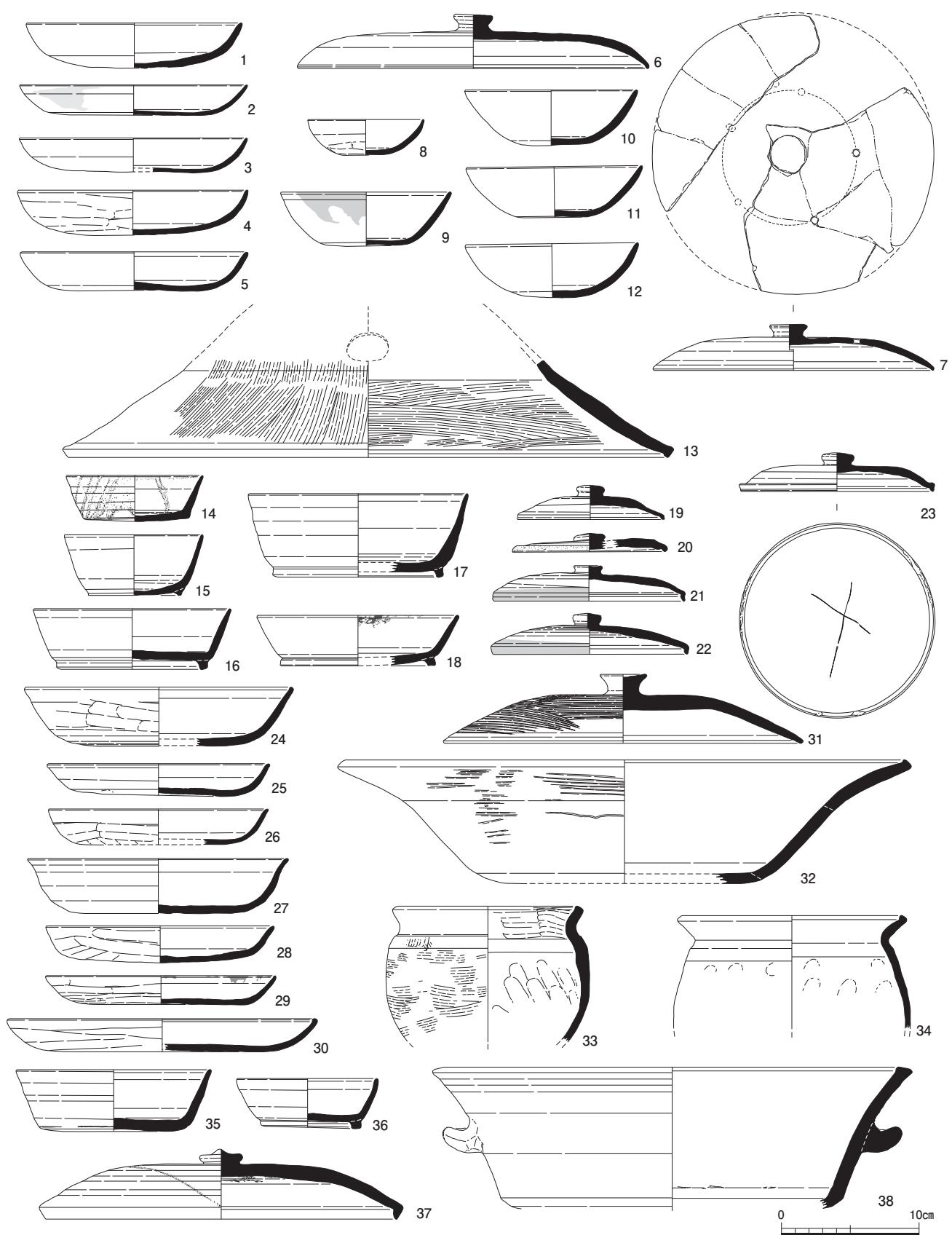


図190 第595次調査出土土器 (1) 1 : 4

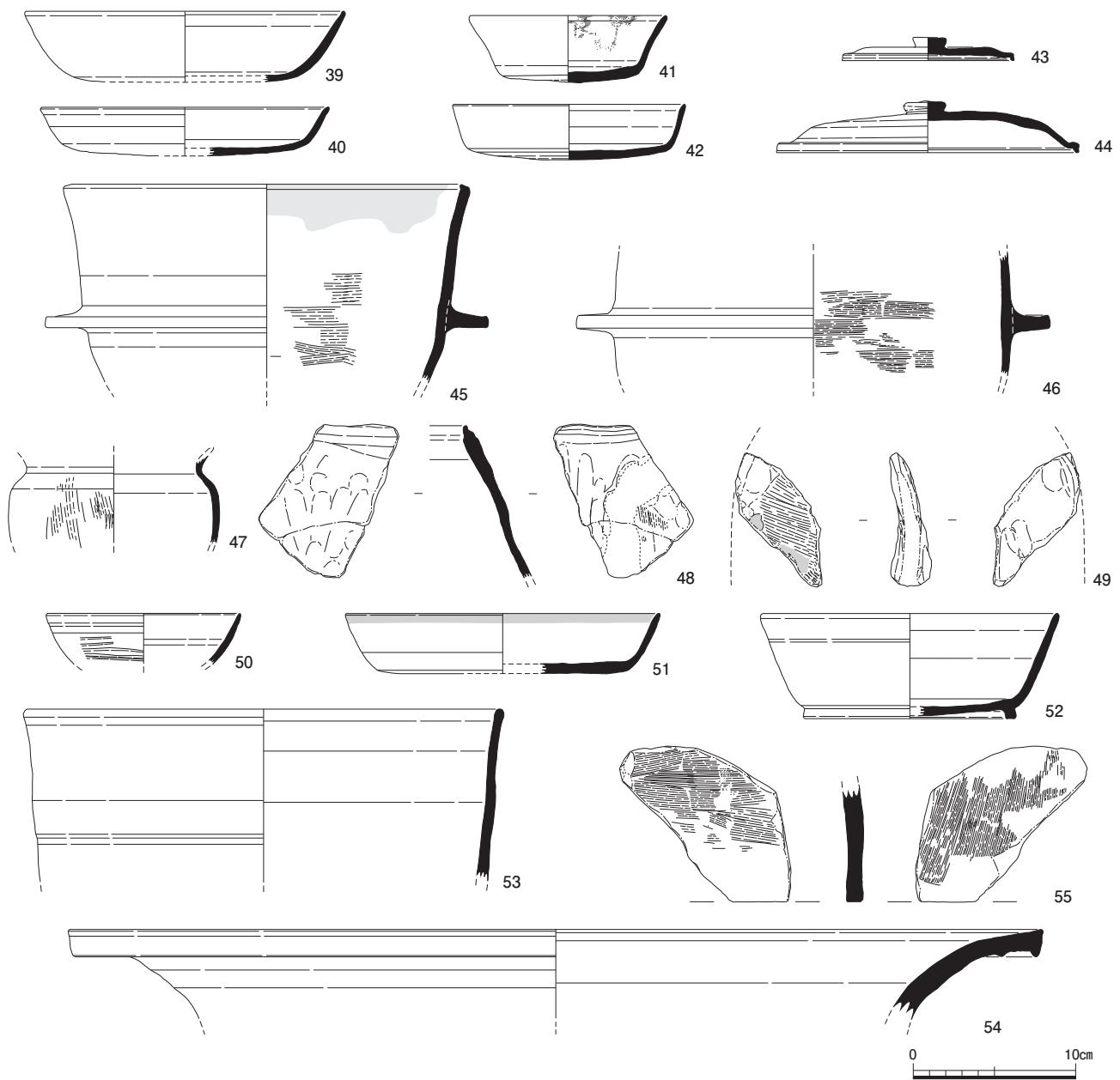


図191 第595次調査出土土器（2） 1:4

で東院6期（D期）のもの。

本調査区での軒瓦の100m²ごとの出土比率は18.1点と総瓦葺建物が並ぶ第一次大極殿地区（12.0点）よりも高い値を示す。これは軒瓦が濃密に出土したと報告された内裏北外郭官衙地区（17.7点）をも上回ることになる¹¹⁾。

調査区中央東部からは多くの軒瓦が出土したが、東院1期（A期）（瓦編年II期）の6308Aa、東院5期（C期）（同IV-2期）6145Aのほか、東院1期（A期）から2期（B期）にかけて（同II-1～III-1期）の6663型式の軒平瓦（5）が集中して出土している。

また、調査区北部で検出した大土坑SK20150からは完形に近い瓦が多く出土し、建物から降ろされてすぐに廃棄された状況がうかがえる。その一方、SK20150から出土した軒瓦の多くが6133A（3）や6702A（6）など東院5期（C期）（瓦編年IV-1期）の瓦であるものの、奈良時

代前半から後半までの瓦が含まれているのも特徴である。
（岩戸晶子）

6 方形区画遺構の性格と特徴

遺構からの構造検証 方形区画遺構SX20100～20107は、周辺を巡る溝に前後関係が確認できず、平面形状も類似して、方位がゆがむ様相も連続的な変化として認められること、また方形遺構SX20108とSX20109が区画以内の位置や規模の点で類似する等の点から、一連でかつ同様の性格を有する遺構群と判断される。ただし、各区画で遺構の残存状況は大きく異なる。

こうした状況から、各区画の遺構残存状況を考慮して、それぞれの区画において最も効率的に情報を得られる細部調査・断面調査を実施し、その成果を集約することで方形区画遺構の構造および性格を把握するという調

査方針をとった。

地下構造についてはSX20104において方形遺構SX20109の断割を行った。小穴についてはSX20100のSX20113および、SX20101のSX20146で断割を実施した。上部構造は不明な点が多いが、SX20101内のSX20110において断割調査を実施し、多くの興味深い所見を得ることができた。

①SX20110の粘土の被熱痕跡と埋土中の炭

この遺構の上で火がたかれるための構造物、すなわち炉床であると想定される。そして、SX20110の被熱状況には偏りがあり、北側で被熱痕跡が弱く、南側で強い。こうした偏りが存在することから、単純な「野焼き」の様な火の燃やし方ではなく、何らかの構造物をともなった燃焼であることを示すとみられる。

そして被熱痕跡の強弱から判断すると、北側が焚口、南側が排気口=煙道にあたる可能性が高い。

②SX20110埋土中の粘土

SX20110に伴う上部構造としては、土器等を設置した場合（韓窓など）と、作り付けの施設の二つが想定される。SX20110の埋土には、炭が多く含まれるとともに、粘土質の土が多かった。この粘土の由来として、上部構造の躯体が想定され、この観点から粘土で構築された作り付けのものであったと推定される。ただし、被熱した粘土が含まれていない点からは、この想定に若干の問題も残る。

③SX20146の状況

煙道側にあたる南側に一連の遺構としてSX20146が存在し、熱を受けていると判断される状況であるにもかかわらず、直接的に火を受けた状況や、周辺に炭の分布がみられない。この点から、SX20110の炉床を越えての直接的な燃焼が存在しないこと、SX20146付近では燃焼はしていないが高熱にさらされていたと考えられる。

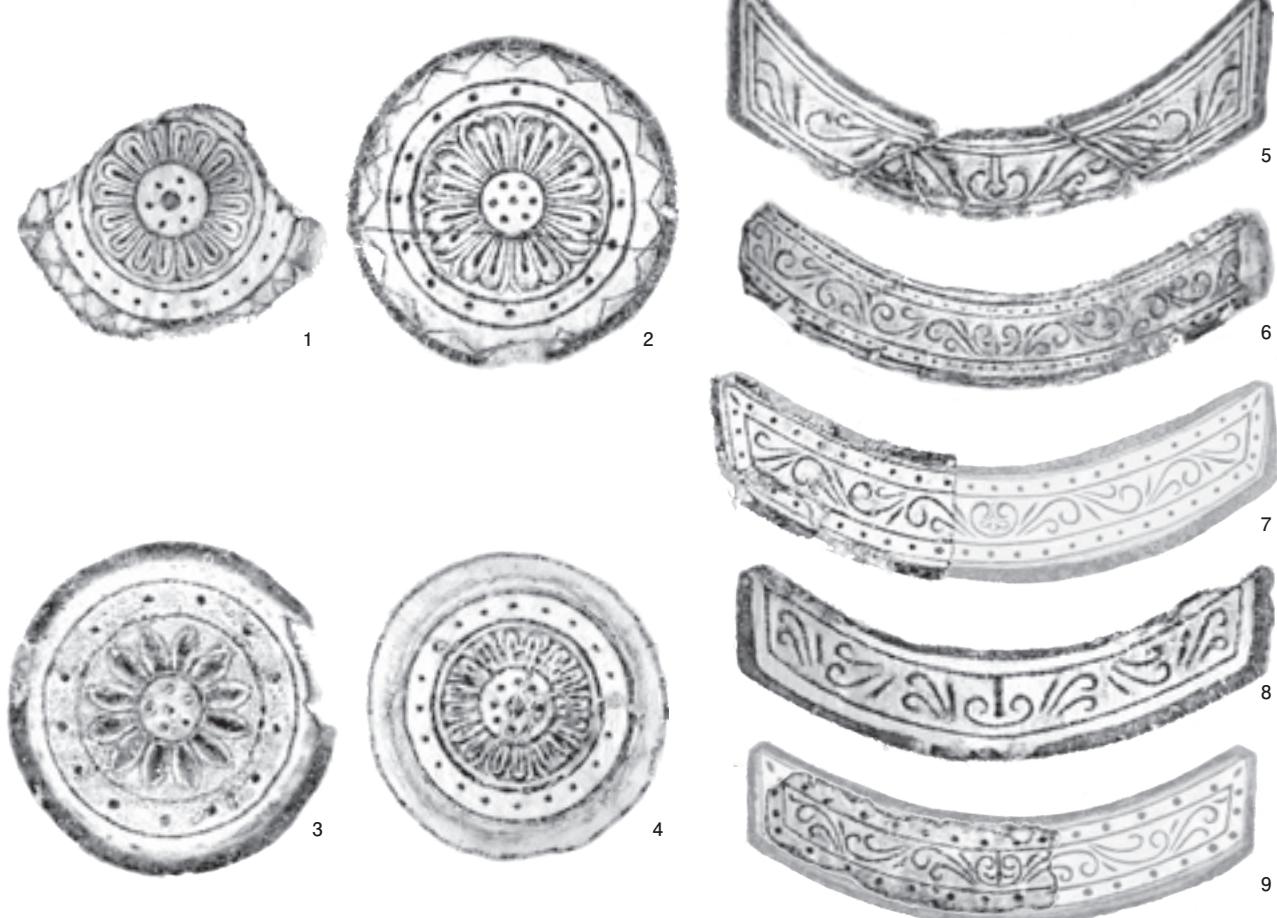


図192 第584次調査出土瓦 1：4

表29 第595次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6133	Aa	5	6641	F	1	丸瓦（刻印・奈良）	1	
	?	1	6663	A	19	平瓦（刻印・奈良）	1	
6134	Ab	1		B	2	（縁釉）	1	
6145	A	1		C	4	面戸瓦（奈良）	2	
6225	A	1		E	1	面戸瓦？（奈良）	1	
	E	1		?	17	台熨斗瓦（奈良）	1	
6231	?	1	6664	D	1	鬼I A	1	
6235	B	2		F	7	瓦製円盤	2	
6282	Ba	4		?	1	瓦製円盤？	2	
	Bb	1	6675	A	2	不明品（奈良）	1	
	E	2		?	1	用途不明瓦製品	1	
	Ib	1	6682	A	1	用途不明道具瓦	8	
	?	5	6685	C	1	磚	5	
6284	Eb	3	6689	C	2	（縁釉）	1	
6303	A	1	6691	A	3	（釉なし縁釉）	1	
6304	?	1	6702	A	6	凝灰岩（部）	1	
6308	Aa	5		?	3	土管	1	
	Ab	2	6704	A	1			
	A	1	6721	C	1			
	B	2		Fa	1			
	?	2		Ga	4			
中近世		1		G	1			
型式不明（奈良）	31			Ha	1			
時代不明	7			H	5			
				?	12			
		6726		E	1			
		6732		C	2			
				L	1			
		6763		A	7			
		型式不明（奈良）	10					
		時代不明	2					
軒丸瓦計		82	軒平瓦計		121	その他計		31
丸瓦		平瓦	磚	凝灰岩	レンガ			
重量	280.068kg	974.554kg	19.007kg	1.307kg	0			
点数	3056	16456	17	6	0			

この状況は煙道にふさわしいが、一方遺構として煙道らしき痕跡は認められていない。煙が燃焼部より高い位置へと流れることを考えると、遺構として残っていない上部に煙道が構築されていたと想定される。この場合、SX20146がその基底部であった可能性が高い。

以上の検討から、SX20110は、上部構造をもつ地上式の炉・竈であったと推定した。そして上述の方形区画遺構群の性格から、これらの方形区画遺構群は竈跡およびその周囲を区画する溝、覆屋の跡と推定される。なお、

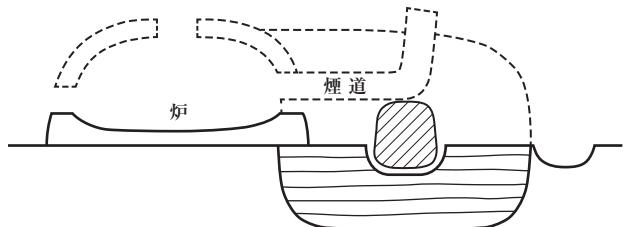


図193 地上式竈復元断面図

SX20110はSX20147より新しいことから、同一の区画を踏襲しつつ、数時期にわたって竈が構築された可能性がある。またSX20110はSX20147よりも若干規模が小さく、本来この方形区画に設置されたものはSX20147であった可能性が高い。そしてSX20147の位置から想定すると、東に隣接するSX20100内の落ち込みSX20152は、ほぼ横に並ぶ位置にあたり、竈の破壊・抜き取りの痕跡である可能性が想定されるであろう。

さて、以上の成果を総合すると、以下のよう構造が推定される（図193）。

一辺約1m程度を深さ20cm程度掘りくぼめて、層状に土を突き固めて地業を施す。この地業に隣接して、土を積み上げ、その上に粘土を皿状に貼り付けて、支柱を用いつつ竈本体を構築する。地業の反対側に焚口を開口する。一方の地業部分には石を据えて基礎として煙道を作り、竈に接続させる。左右および煙道側の外部は溝で区切り、水分の影響を防ぐ。

以上、本遺構群は地上式の竈遺構群であると判断される。

（馬場・国武）

土器の出土傾向 上記の見解を補強するために、方形区画遺構からの土器の出土傾向を仔細に見ておきたい。先に見たSX20101からは詳細な分析にたえる出土土器を得ることができなかつたため、同じく重点調査を実施したSX20100・20104をやむをえず分析対象とした。同遺構からは計882点の土器片を出土位置別に得ており、定量分析がある程度可能である（表30）。東端のSX20100では、計499点の土器片（土師器397点、須恵器102点）を採集した。このうち、器種分類が可能な破片は、土師器68点、須恵器41点である。土器のはほとんどは周囲を取り囲む溝（未発掘の南溝を除く）から出土しており、方形遺構SX20108よりも南の東・西溝からの出土が顕著である。一方、SX20108からは、土器の出土がほとんど認められない。北溝もまた、東・西溝に比べて限られた数量の土

器のみが得られた。土師器は、東・西溝では杯A・椀A・皿Aをはじめとする供膳具類が多数を占めるが、甕・鍔甕・竈といった煮炊具類も出土した。須恵器もまた、東・西溝から多数が出土しており、北溝および方形遺構SX20108周辺では極めて少ない。東・西溝からは、須恵器杯B・杯B蓋がとくに多く、壺・甕類は少ない。

SX20104では、計383点の土器片（土師器294点、須恵器89点）を得た。このうち器種分類が可能な破片は、土師器29点、須恵器22点である。SX20100に比べて出土資料数が少なもの、基本的な傾向は類似している。まず、土器の多くは方形遺構SX20109よりも南の東・西溝から出土した。表2中SX20109（断割）からの出土土器は、SX20100に比してやや多いもののやはり少ない。また、SX20100では未発掘の南溝からは、かなり僅少な土器片のみが得られた。土師器は、供膳具である椀類と皿Aを主体とし、これに加えて甕、瓶、竈が少数みられた。須恵器は、杯B・杯B蓋が主体を占め、壺・甕類は極めて限られる。

このように、SX20100・20104ともに東・西溝内からの土師器の出土が圧倒的に多く、土師器・須恵器とともに供膳具である杯・椀・皿類が多数を占める状況が明らかになった。しかし、少数ながらも、一般的に出土する土師器甕類に加えて、同じく土師器の鍔甕・瓶・竈も出土しており、加熱調理に関わる器具と捉えられる。とくに、奈良時代において鍔甕はその存在自体が稀有であり、今回出土したような頸の高い器種は、宮内とその周辺ではこれまで類例が知られていない。胴部上半に水平に鍔が取り付けられていることから、後世の土釜に類する使用法も想定できるが、機能の詳細は不明である。とはいっても、こうした特殊な器種を含む煮炊具類が供膳具類とともに出土したことは、方形区画SX20100・20104が加熱調理に関わる遺構であった可能性を示唆している。

加えて、土器の出土状況は、方形区画遺構の溝内側北部、堀込地業が施された一角に何らかの構造物が存在した可能性を裏付ける。東・西溝で土器が主に出土したのは、方形遺構SX20108・20109よりも南の部分であった。さらに、SX20108・20109の北側を廻る北溝で土器の出土数が僅少であったこともあわせると、SX20108・20109の上に元来は上部構造が存在し、これを取り囲む溝への遺物の流入が阻害されていたと捉えることができる。

表30 方形区画SX20100・20104出土土器の器種組成

器種	SX20100				SX20104			
	東溝	西溝	北溝	SX 20108 (貼床)	東溝	西溝	北溝	南溝
杯A	4	4					1	
杯B	1		2					3
杯B蓋	2	3	1	1		1		
杯C		4						
皿A	5	9	1		7	1		
皿B蓋								2
椀A	6	3	1		2	1		
椀C	5				1			
土師器	高杯A盤	1						
	大型蓋	1					1	
	甕A	1	2			1		
	甕B		1			1		
	鍔甕	1	1					
	瓶					1?		
	竈	3	2	1	1	1		
その他	破片	158	140	29	2	65	51	87
							18	44
須恵器	杯A		1		1			
	杯B	3	4	1		3	1	2
	杯B蓋	4	16	2		4	1	
	杯C		1					
	皿A		2				1	
	鉢A盤					1		
	鉢E							1
	壺A蓋		3			1		
	甕A	1			1	1	1	
	甕C		1					
その他	破片	33	20	7	1	23	13	12
							6	13

したがって、土器の出土傾向は、方形区画遺構の検出状況から導かれた解釈とおおむね整合的であり、方形区画遺構群は地上式竈をともなう加熱調理のための一連の施設であった蓋然性が高いといえる。
(山藤)

文献・絵巻からの検証 加熱施設としての「カマド」の語は古くから見ることができるが、具体的な構造を示す文字資料には乏しい。「正倉院文書」中には「竈」「竈戸」などの語句が散見するが、数え方等から考えると作り付けの竈ではなく、移動式の竈の可能性が高いとみられる。一方、『日本靈異記』下巻「女人濫嫁飢子乳故得現報縁 第十六」には、「両乳脹大、如竈戸垂」と乳房が腫れ上がっている様子を「竈戸」に例えている記載が

あり、これは据え付けの地上式カマドを指すと考えられる（狩野敏次『かまど』法政大学出版局、2004他）ことから、土を固めて饅頭状にしたカマドが奈良時代には既に普遍的に存在していた可能性を想定できる。

絵画資料では、『信貴山縁起絵巻』に描かれたカマドが最古の例とみられる。このカマドは、三方が吹き放ちの仮小屋的な屋根の下に設置されており、正面と両側、および上部に穴が空いている様に描かれ、煙出は見られない。このカマドは製油のためのもので、調理用ではない。他の絵巻類でも描かれるカマドは調理用よりも、湯沸かし（入浴用）が多く、湯沸かし用のカマドでは地面から一定程度高めた土壇の上に構築されて描かれる。煙出が描かれた事例は、見いだすことができなかった。

以上より、①奈良時代には移動式カマドと、据付の地上式カマドが併存したとみられる、②地上式カマドの形状は今日にカマドの形状に類似する、③煙出の有無は不明、だと考えられる。今回検出した遺構を奈良時代の据付地上式カマドと考えると、①②の点は合致し、それに煙出がついたものとみることができる。なお、韓国では煙出を伴うカマドが通例の様子であるが、十分な確認は行えていない。

（馬場）

7 井戸SE20000と南北棟建物SB20120周辺の空間利用

本調査区北部はC期に再整備され、南北棟建物SB20120が造られるとともに、建物の範囲に小礫敷きが見られた。B期におけるやや乱雑に並んだ竈施設とこれを覆う簡易的建物の面影はもはやなく、どこか整然とした空間利用が見られるのである。さらに、SB20120の西方には第593次調査において検出した井戸SE20000が存在し、両者は階段SX20119を通して空間的につながっていたことが今回明らかになった。以上から、C期には第593・595次調査区の範囲の空間利用が大幅に見直され、西方の井戸SE20000から東方のSB20120・SB20130とその周辺が一連の空間として整備されたと考えられる。この一連の空間はどのように用いられたのであろうか。

まず、東を正面とする井戸SE20000とその西側に接続する溝SD20010～20013は配水を意識した一連の構造を呈しており、SD20010～20013周辺ではSE20000からの滞水を用いた、洗い場に類する機能を有していたと考えられる¹²⁾。これは奈良時代後半の東院中枢部における食

膳を担った厨の一郭であった可能性がある。

井戸の東方、階段SX20119を上った東側には小礫敷きをともなうSB20120が位置しており、この建物を中心多く炭を含む層が広範囲に広がっていた。加えて、被熱痕跡SX20140～20143も認められることから、この一帯で火を扱う活動が行われていたと推測できる¹³⁾。なお、これらの被熱痕跡と周囲からは羽口や鉄滓は出土せず、冶金関連の遺構の可能性は低い。

さらに、SB20120の南には、SB20130とこれを取り囲む溝SD20132～20134が造られる。ここからも被熱痕跡SX20145が得られたものの、SB20120とその周辺とは異なり、炭を含む堆積土は多くは認められない。建物を囲むSD20132～20134からは、一時に埋められたとみられる土器群が多量に出土し、これらの大半は杯・皿・碗といった供膳具で占められる。

以上から、第593次調査から今回調査区わたる一連の空間は、場所によってその様相が若干異なることが判明した。これは何を示しているのだろうか。井戸SE20000周辺の洗い場が厨の一郭であるとすれば、東方に続く遺構群は同じく、厨の空間内であったと捉えることができる。多量の炭が混じる土層と被熱痕跡を検出したSB20120とその周辺は加熱調理場として、また、多量の供膳具の出土をみたSB20130とその周辺は配膳場として機能したと考えることができる。このように、場所ごとに機能を分けて空間を利用していた蓋然性が高い。こうした機能の検証は、隣接地における今後の発掘調査の成果を併せて、広い視野を持って継続的に行われなければなるまい。いずれにせよ、これまであきらかではなかつた奈良時代の大規模な厨の空間の実態を考えるうえで、貴重な発見と考えられる。

（山藤・海野）

8 遺構変遷

以下では、第595次調査区で検出した遺構の変遷を整理する（図194）。

A 期 調査区西半に、第593次調査区から続く東西棟建物SB1999が建てられる。この建物は、第584次調査区で検出した南北棟建物SB19515と柱筋が揃い、両者はL字形の空間を構成していたとみられる。

B 期 調査区東北で、周囲に溝が廻る大型の南廂付き東西棟建物SB20060が造られる。この建物の西側には、

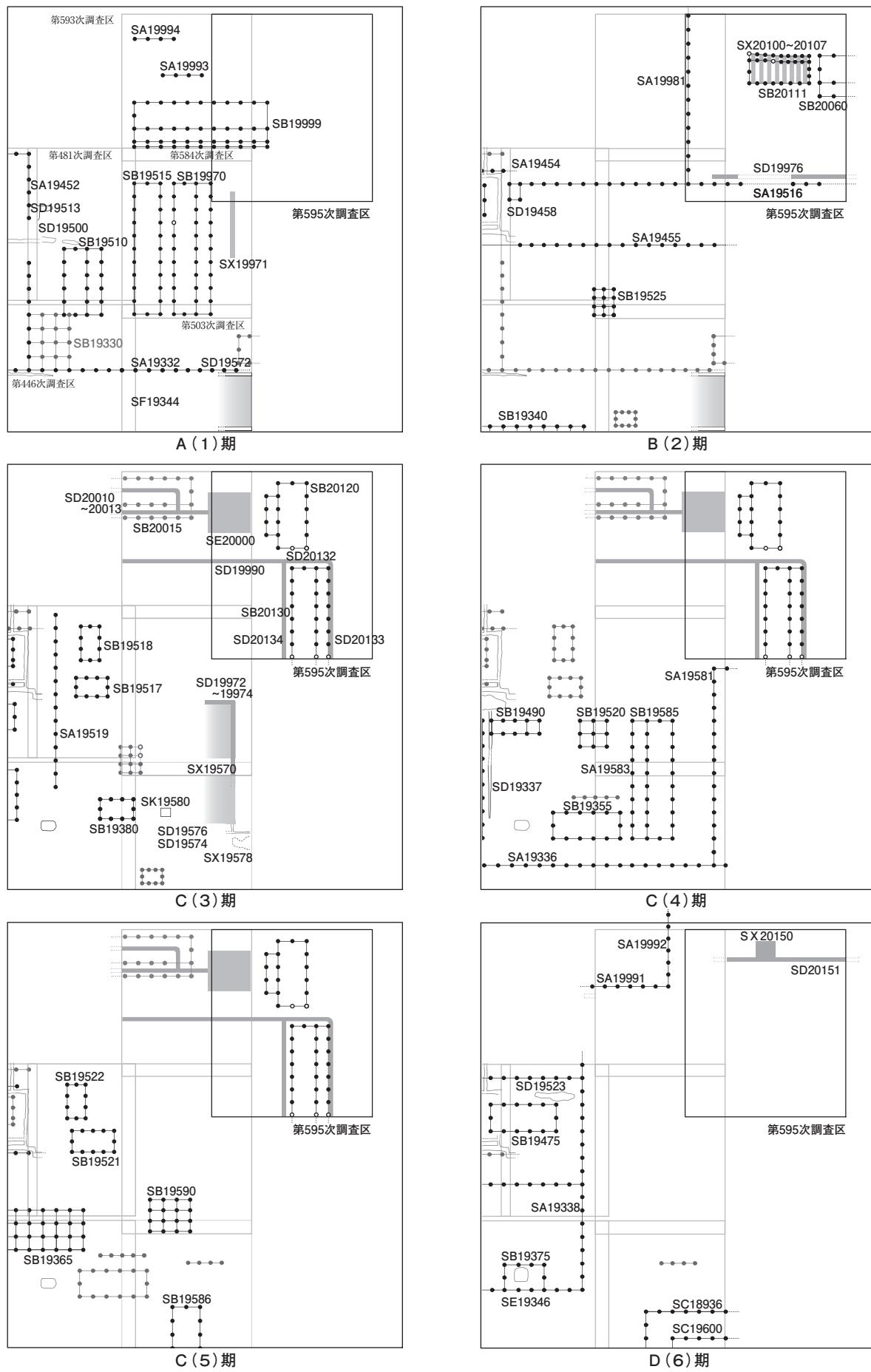


図194 遺構変遷図

竈施設と思しき方形区画SX20100～20107が計8基東西に連なっており、これら全体を覆うように仮設的な建物SB20111が建てられた。なお、竈には造り替えがみられる。

調査区南部では、西の第584次調査区から東西塀SA19516が東へ続いている。すぐ北側には、同じく第584次調査区で検出した東西石組溝SD19976の石抜取穴・抜取溝がSA19516と並行して断続的に東方へ続く。

C期 調査区西北に、小礫敷きをともなう南北棟建物SB20120が建てられ、西方の井戸SE20000との間をつなぐ階段SX20119が設けられたと考えられるが、SX20119の構築時期についてはなお一考の余地がある。南北棟建物SB20120内は、被熱痕跡SX20140～20143をともなう。調査区中央には、東西溝SD19990とこれに接続して東に続く東西溝SD20132と、これに接続して南に続く南北溝SD20133・SD20134による区画内に、南北棟建物SB20130が建てられる。SB20130の北半、東廂下には被熱痕跡SX20145がともなう。上記2棟の南北棟建物は柱筋を揃えない。

D期 調査区北部を横切る東西溝SD20150が造られる。また調査区西北において、東西溝SD20150の北縁の一部を壊す大土坑SX20150が掘り込まれた。調査区南半では遺構が認められず、全体として建物が希薄である。

9 まとめ

今回の調査により、周囲の調査成果とも整合する4期(A～D期)にわたる遺構の変遷を確認し、以下の3点の成果をえることができた。

1) 奈良時代の整地3回分を確認

奈良時代前半の整地土の上に、奈良時代後半(C期)・末期(D期)の整地を確認した。下層のC期には小粒の礫敷きを造り、その上に炭混じり土を積んでから上層(D期)の大粒の礫敷きを構築する。東院地区において、奈良時代後半以降の改作にともなう連続する整地の確認ははじめてであり、改作の際に大規模な土木工事が行われていたことがあきらかになった。

2) 地上式竈と思われる施設を検出

奈良時代後半(B期)には、調査区北部の大型東西棟建物SB20060の西に、素掘溝に囲まれた方形区画8基(SX20100～20107)が東西に連接する状況を確認した。さらに、簡易的な東西棟建物SB20111がこれらを覆うこと

もあきらかになった。方形区画は、部分的な掘込地業や炭化物の堆積状況、また、土器の出土傾向などにかんがみて、地上式窯の痕跡と考えられる。地上式竈が建ち並ぶ加熱調理に関わる空間であったと考えられる。

3) 大型井戸から続く階段・建物・被熱痕跡の検出

奈良時代後半(C期)の調査区西北部では、西の第593次調査区の大型の井戸SE20000から東へ上がる階段SX20119と、その東に南北棟建物SB20120を検出した。南北棟建物SB20120の範囲には小粒の礫敷きが見られるのみならず、4ヵ所の被熱痕跡(SX20140～20143)と多量の炭を含む堆積を確認した。さらに、調査区南半では、南北棟建物SB20130と、これを区画する溝(東西溝SD19990・20132および南北溝SD20133・20134)を検出した。これらの溝からは多量の食膳具が出土した。井戸SE20000周辺は厨の一部と考えられるが、その東側、南北棟建物SB20120周辺は加熱調理に関連する施設、また、南の南北棟建物SB20130は配膳に関連する施設ととらえられ、やはり厨の一部を構成していたと思われる。したがって、場所により異なる機能を有する規模の大きな厨が、本調査区とその周辺に存在していた可能性が想定されよう。

(山藤)

註

- 1)「東院地区の調査－第584次・第587次・第593次」『紀要2018』。
- 2)「東院地区の調査－第401次」『紀要2007』。
- 3)「東院地区の調査－第421・423次」『紀要2008』。
- 4)「東院地区の調査－第503次」『紀要2014』。
- 5)前掲註2。
- 6)「東院地区の調査－第292次・第293-10次」『年報1999-III』。
- 7)「東院地区の調査－第381次」『紀要2006』。
- 8)「東院地区の調査－第446・469次」『紀要2011』。
- 9)「東院地区の調査－第481次」『紀要2012』。
- 10)これまでにも東院の造営当初の整地は部分的に確認していたが、奈良時代後半以降の改作にともなう整地の確認ははじめてで、改作の際にも大規模な土木工事をおこなっていたことがあきらかになった。
- 11)「左京二条二坊十一坪の調査－第279次」『年報1997-III』。
- 12)前掲註1。
- 13)平城宮内では大膳職地区・内膳司地区などでも火を用いた調理がおこなわれたと考えられるが、これらの地区では調理のための火を用いた痕跡は確認していない(奈文研『平城宮発掘調査報告Ⅱ』1962)。